ISSN 1344-5561
京都府立大学図書館報
なからぎ
２１１号
２０１５年10月

文化財の併合

文学部長　渡　邊　　伸

先日、久しぶりにＪ・フランケンハイマー監督の映画『大列車作戦（原題 The Train)』を見た。第二次大戦下、フランスを占領したドイツ軍がゴッホ、ゴーギャン、ルノアール、マネ、ドガ、ミロ、セザンヌなどの名画を持ち去ろうとするのを、フランス鉄道の操車係長たちが死を賭して阻もうとした姿を描いた作品である。「美は、私のような理解できる者のものだ」と豪語するドイツ軍将校に対し、それまでレジスタンスに関わっていなかった無骨な機関士までもサボタージュに加わって処刑される姿が対比される。

ところで、ドイツ軍将校と同様の言説は他にもある。「親愛なる同僚たちよ。諸君が占領する地域を完全に武装解除し、そこから諸君の役に立つあらゆるものを引き出すことを急ぎたまえ。……この地方に豊富にある絵画のすばらしいコレクションをここへ移したまえ。」「共和国はその力、その知識と芸術家の優越によって、それらの傑作に対して不可侵の避難所を与えうる世界でただ一つの国である。」

実は、これらは他でもない、フランスの主張なのである。「ルーベンス、ファン・ダイク、そしてフランドル派の他の創始者たちの画筆がわれわれに残した不朽の作品は、もはや外国の地にあるのではない。……芸術と天才の故郷、自由と神聖な平等との祖国、フランス共和国に寄託されているのだ。」

軍事侵攻による美術品などの収奪は、ヨーロッパにおいても古くから行われており、とくにルネサンス以降は組織だって行われた慣行がある。しかし、大革命からナポレオン期のフランスの文化財「収集」の特色は、軍事的強奪の性格を否定できないまでも、賠償金の名目など「合法的な譲渡」の形をとろうとしたこと、フランスのもつ高い文化財修復能力を用いて文化財の修復・保存・保護を行ったこと、さらにルーブル美術館の創設などによって文化財を貴顕の独占から開放し、公開するという行動を実際にとったことにある。服部春彦氏の新著『文化財の併合』が「併合」と記する所以の一端である。

本書は、革命期フランスによる各国からの文化財の「併合」について、その組織的収集から、公開・利用の実態、ナポレオン没落後の返還に至るまでの全体像を明らかにしている。とくに、ナポレオン戦争後の各国からの返還要求に対して、フランスは概ね個人資産や未公開のものは返還することになったが、その間のフランスの粘り強い交渉経過は、ヨーロッパの外交の特徴を考える上でも大変興味深い。

昨今の文化財をめぐる国際問題の報道をみるにつけ、問題の深刻さを痛感するのだが、本書にはこのような問題解決の判例を見いだすことができるであろう。

（わたなべ　しん：文学部教授）

御紹介の『文化財の併合－フランス革命とナポレオン－』服部春彦著、知泉書館（請求記号　709.35‖Ｈ）は、２階閲覧室入口に配架していますので御活用ください。

読書のよろこび

図書館運営委員　矢　内　純　太

人はなぜ本を読むのだろうか。

先人の書いた随筆や批評を手に取り、書いてあるがままに読み進んでいくと、その先人の物事の捉え方や考え方、さらには生き方がおのずと心に入ってくる。本を読み進むうちに、違う時代の違う場所に生きる人であっても、著者が親しい友人のように感じられることも多い。また、古今東西の小説や詩を読むと、自分のささやかな日常とは全く異なる物語があり、全く異なる世界がひろがっている。その意味で、読書は新たな人生を生きることでもある。読書は時間や空間を超え、私たちの人生を文字通り豊かにしてくれるのだと私は思う。

世の中に様々なメディアが溢れる昨今、本を手に取る人が少なくなっていると聞くが、だからこそ読書の楽しみを多くの若い人たちに知ってほしいと思うし、共有したいとも思う。そのため、私自身のささやかな読書体験を通じて、学生の皆さんが「読んでよかった」ときっと思えるであろう数冊の本を紹介し、読書の薦めとしたい。

一冊目は「寺田寅彦随筆集」である。東大の物理学の教授であり、夏目漱石の門下でもあった寺田寅彦は、科学的視点と芸術的視点を併せ持つ稀有な人物であったが、この本にはその資質が遺憾なく発揮されている。すなわち、現代において地震や集中豪雨などが起こるたびに昔からの基本的心構えの手引きとして紹介される「天災と国防」や、物理的温度と心理的感覚の差異を論じ、暑さがなければ涼しさはないと断じた「涼味数題」などの科学的考察に基づく話から、「俳句の精神」や「浮世絵の曲線」などの芸術論、さらには科学者とはどのようなものかを考察した「科学者と芸術家」「科学者とあたま」など、幅広い題材が自在に論じられている。その中でも私が特に感銘を受け、皆さんにも一読を薦めたいものとして、「電車の混雑について」と「どんぐり」がある。前者は、身体が病弱なため満員電車には乗らず空いた電車が来るまで待つことを日課にしていた著者が、満員電車と空いた電車がある規則性を持って現れることに気づくことから話が始まり、電車の来る時間間隔とその電車の空き具合を調べ、そのような現象が起こる理由を電車の側からまた乗客の側から理論的に考察していく。そこから、現在のフラクタル理論にもつながる「ゆらぎの拡大」という科学的視点を提供するとともに（金平糖のでき方も同様だそうだ）、その現象と関連して、私たちの生き方に対しても本質的問いかけをしてくれる。ほんの10ページ程度の文章で、読者は読書の醍醐味を味わうことができる。一方後者は著者の若かりし日々のスケッチである。細かな内容は読んでもらうに如くはないので書かないが、俳句にも似た切れ味のいい話の展開によって、大いに心を揺さぶられるであろう（ハンカチの準備が必要かもしれない）。この２編を同じ著者が書いていることに対して、私は驚きを禁じ得ないとともに、大いに敬意を表したい（本学図書館に全集あり）。

二冊目は高田宏著「木に会う」である。著者は、自然に対する深くかつ温かい理解のある作家であり、「猫」「雪」「木」という具体的な対象を論じることによって、抽象的概念

に留まらない自然論を展開している。本書では、屋久島の縄文杉の下で一晩を過ごし、白山のブナの森を散策し、はたまた信州の雪深い秋山郷を訪れることを通じて、それぞれの場所での木と人との関わりを縦横に論じている。また、明治維新後の木曽林の官有地化の話から「森は誰のものか」を考え、能面師や木工師との対話から木の特性やぬくもりに留まらず、木と人との関わり、ひいては自然と人との関わりについて静かに考えを進めている。さらに、草津白根山や浅間山麓鬼押出しなどの木の生えない環境を訪れることで、陸地に木が存在することの意味や重要性に思いを馳せている。このように、著者は自然保護を声高に語るのではなく、逆に静かに語りかけている。対象の捉え方やその考えの伝え方など、「土壌」という自然物を対象とする研究を進めている私個人としても、非常に参考になる点の多い本である。自然について語りかける書物として、また生き方を問いかける書物として、多くの人に読んでもらいたい。

三冊目は小林秀雄著「考へるヒント」である。著者は昭和の批評家の第一人者であり、文芸に留まらず、音楽や絵画に至る幅広い批評を展開した人である。教科書や入試問題にも著書が時々採用されているから、知っている人も多いと思う。本書は、「常識」「良心」「歴史」「言葉」「役者」「平家物語」「プルターク英雄伝」「福澤諭吉」など、本質的な概念や古典的名著について彼自身の見方を簡潔かつ鋭く論じている。多くの人が指摘するように、必ずしも読みやすい文章ではないが、時代によらず重要であると考えられる内容を著者の視点で辿っていくと、納得するにせよ疑問を持つにせよ、自分で考えるためのきっかけを与えてくれる。文字通り「考へるヒント」となる書物である。例えば、「福澤諭吉」において、福澤の偉さは、漢学から洋楽へ移行する明治初期において新学問の明敏な理解者解説者であったことではなく、この思想転向において日本の知識人が強いられた窮地困難こそが、旧文明の経験によって新文明を照らすことができる「今の一世を過ぐれば、決して再び得べからざる」「僥倖」であると知っていたことにある、と著者は論じている。また、「学問のすすめ」や「文明論之概略」は福澤諭吉という人間が賭けられた啓蒙書であり、「一身にして二生を経る」過渡期は君自身の内的な経験そのものであるという。そして、「過渡期でない歴史はない」と述べることで、私たち自身の問題として問いかけてくるのだ。世界人口が72億人を上回り2050年には95億人に達するとされ、地球温暖化や環境破壊なども深刻化する21世紀初頭の現代において、あるいは日本社会の基本理念の大きな転換が、国民の理解が十分得られぬままに図られつつある戦後70年の現代において、私たちはどのような「過渡期」に位置しており、どのような「今の一世を過ぐれば、決して再び得べからざる」状況に直面しているのだろうか —— 私たちひとりひとりが真剣に考えることこそが、今も著者から求められていると言えよう。

川端康成は、ノーベル文学賞の受賞に際し、出身高校（私の母校でもある）の文学記念碑のために、論語の「以文会友」という言葉を揮毫している。「文ヲ以テ友ト会ス」と読むという。これこそが、読書のよろこびを端的に表す言葉であろう。秋の夜長、是非「以文会友」をともに楽しみたいものである。

（やない　じゅんた：
生命環境科学研究科教授）

御紹介の『寺田寅彦随筆集』寺田寅彦／小宮豊隆著、岩波書店（請求番号914.6‖Ｔ‖１～５）、『木に会う』高田宏著、新潮社（請求番号914.6‖Ｔ）、『考へるヒント』小林秀雄著、文藝春秋（請求番号914.6‖Ｋ‖１～４）、『学問のすゝめ』福澤諭吉著、講談社、（請求番号370.4‖Ｆ）、『文明論之概略』福澤諭吉著、岩波書店（請求番号361.5‖Ｆ）は、２階閲覧室入口に配架していますので御活用ください。

❖❖❖❖❖❖❖ 平成27年度蔵書整理報告 ❖❖❖❖❖❖❖

８月13日（木）～31日（月）の間、附属図書館２階閲覧室を休室して蔵書整理を実施しました。期間中は皆様には大変ご迷惑をおかけしました。

新図書館システムの導入で、ハンディターミナルの台数が増え、数年ぶりに期間内に図書館内全蔵書を点検することができました。

蔵書点検

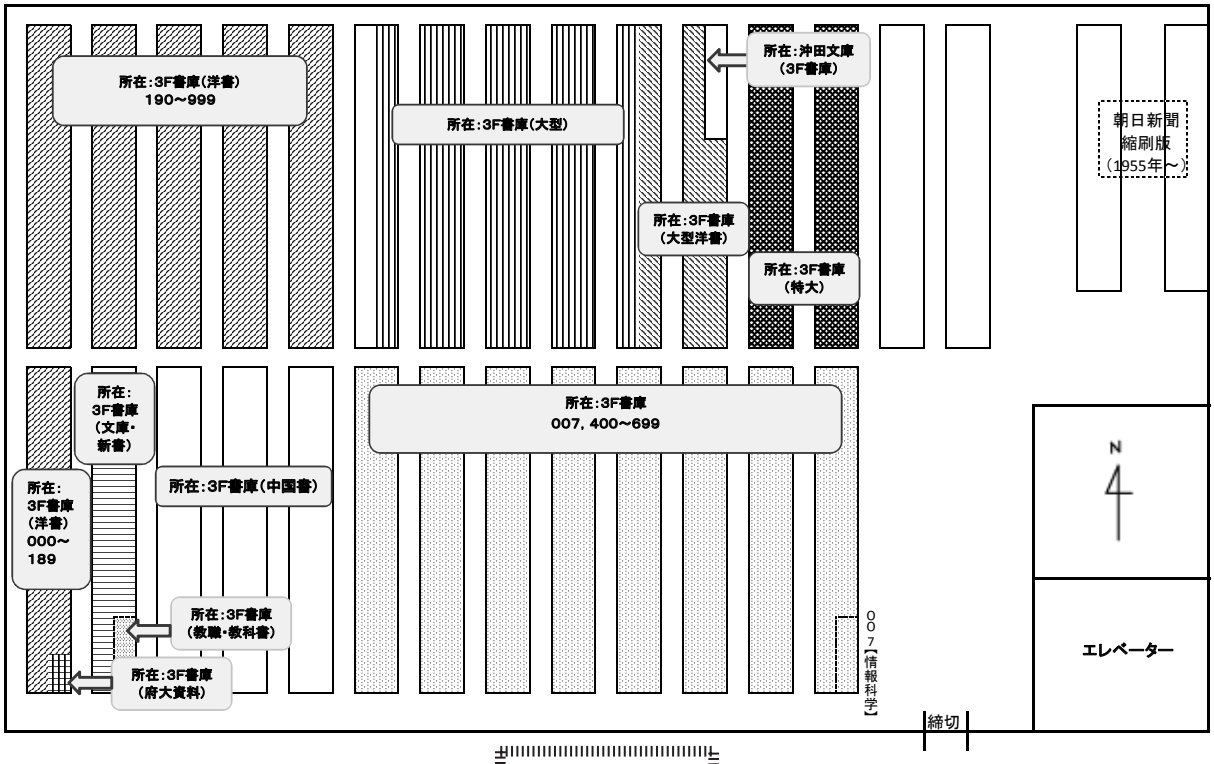
アルバイト学生さんも加えて、約19万冊の図書に貼付しているバーコードを１冊ずつ読込む作業を行い、紛失や配架間違いがないかを確認しました。

図書の形態は実に様々です。例えば、『慶長昭和京都地図集成：1611（慶長16）年～1940（昭和15）年』(1) のように大きさが46×62 cm、重さが８kg を超えるものもあれば、『Jumping Joan』(2) のように大きさが11 cm しかないもの、『神足遺跡：第16次発掘調査略報』(3) のように12ｐしかない図書の場合、他の図書との間に紛れ込んでしまうおそれもあります。また、破損しやすくなっている図書や和装本等もあり、単調な作業と思われがちですが資料に応じた取扱いが必要となります。

(1) 所在：３Ｆ書庫（特大）請求記号：291.62‖Ｋ　(2) 所在：開架　請求記号：388.933‖Ｆ‖７
(3) 所在：１Ｆ書庫　請求記号：216.2‖Ｎ‖３

書庫資料の移動作業

資料の増加に伴い、蔵書整理期間中に３Ｆ書庫と東書庫Ⅱの移動を行いました。特に３Ｆ書庫は移動した図書も多いので、書庫内の案内図や書架表示を確認していただくようお願いします。



３Ｆ書庫案内図

図書館日誌

平成27年度　第１回　図書館運営委員会開催報告

平成27年度第１回の附属図書館運営委員会が７月６日（月）に第１会議室で開催されました。その概要は、次のとおりです。

協議・報告事項

⑴　各ワーキンググループ（WG）の継続とメンバーの確認について

「自己評価・あり方検討ＷＧ」、「選書ＷＧ」、「電子ジャーナルＷＧ」の３つの枠組みの継続を確認し、各ＷＧのメンバーが決定された。

⑵　平成26年度の決算及び事業報告について

決算及び活動報告のほか、既に著作権処理が完了している本学学位論文（博士）について、学術機関リポジトリに公開したこと、医科大学、総合資料館との３巻統合検索システムが稼働したこと、図書館運営費から捻出しe-Book を購入したこと、新図書館整備の準備状況、電子ジャーナルの購読契約について等、各委員の意見交換を経て、承認された。

⑶　平成27年度予算について

財政状況が厳しい中、図書購入費について200万円増額になったこと、システム維持管理費の増額については、３館統合システムの稼働による負担金であること、新館用の備品費、ＩＣタグの貼付費等で大学費として予算措置されたもの等を説明し、承認された。

⑷　電子ジャーナル購読について

2015年度契約について既に予算オーバーとなっており対策が必要である。早急に電子ジャーナルＷＧで検討案を作成し、運営委員会で報告議論したい旨提案し各委員からの質問、意見交換を経て了承された。

⑸　学習基本図書の購入リスト提出について

本運営委員会で承認を受けた後、全教員への依頼を行う予定。教員会議への報告を依頼し、承認された。

⑹　新図書館の整備について

工事の進捗状況、検討状況について報告のあと、質疑、意見交換を行い、図書館運営員会として検討に向けての確認や、情報共有をおこなった。

⑺　その他

以下の予定について説明、協力依頼をおこなった。

①　夏休み長期貸出について
　学部生・院生への長期貸出冊数を昨年度同様12冊とする

②　蔵書点検日程について

③　新館準備作業について

平成27年度　図書館運営委員会（ＷＧ体制案）

27. 4. 1 現在

所　属	職　名	委員氏名	所属ＷＧ
附属図書館	館　長（文学部教授）	浅　井　　学	
文　学　部	教　授	山　崎　福　之	自己評価・あり方検討
	准教授	出　口　茉　摘	選書
	教　授	中　　純　夫	電子ジャーナル
公共政策学部	准教授	下　村　　誠	自己評価・あり方検討
	准教授	竹　部　晴　美	電子ジャーナル
	准教授	田　所　祐　史	選書
生命環境科学研究科	教　授	矢　内　純　太	選書
	教　授	牛　田　一　成	電子ジャーナル
	講　師	朴　　恩　榮	自己評価・あり方検討
	准教授	田　伏　正　佳	電子ジャーナル
	教　授	檜　谷　美恵子	自己評価・あり方検討
	准教授	宮　藤　久　士	選書
附属図書館	事務長	小　林　秀　子	
	主　査	亀　村　志　保	

図書館からのお知らせ

「2015オープンキャンパス」；図書館も開放しました！！

７月25日（土）・26日（日）の両日本学のオープンキャンパスが開催され、好天にも恵まれ、参加者は昨年を大きく上回る大勢の高校生、保護者の方々で賑わいました。

図書館では、両日の午前10時から午後４時まで２階閲覧室を開放し、府大コーナーや専門書等の蔵書資料をゆっくり手にとってご覧いただきました。

開館と同時に多くの高校生、保護者の方々で溢れ、校内ツアーコースで図書館を見学した人、ご家族連れ、模擬授業等の合間に見学する人、あらためて再度訪れゆっくりと手にとって見る人等々、閉館時間まで有意義に過ごしていただきました。

参加者は、25日（土）440人（うち高校生289人）、26日（日）1,069人（うち高校生730人）の合計1,509人と昨年を上回る来場者で賑わいました。

閲覧室の様子を見て回る方が多い中で、座席で熱心に読書をする方、府大図書コーナーや大型図書に興味を持たれた方、また、校内ツアーでは案内する本学学生から詳しく説明を受ける様子も多く見受けられました。

豊富な資料や、新図書館への期待など図書館に対する感想も多く寄せられており、今度は本学学生としてゆっくり図書館を訪れてもらうことを願いながら、今後ともサービス向上に努めていきます。

〈高校生等で賑わう閲覧室〉

カレンダー

開館時間

9:00～21:00	9:00～17:00	休館 土日祝 年末

☆閉館時の図書の返却は、図書館西側（喫煙コーナー付近）の返却ポストをご利用ください。

2015年10月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

2015年11月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

2015年12月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

★10/5（月）　夏休み貸出返却期限

★12/11（金）～　冬休み長期貸出開始
　※返却予定日　1/14（木）
★12/25（金）　年内最終開館日
　※土日の関係で例年より早いのでご注意ください。
★12/26（土）～ 1/4（月）　年末年始休館
★1/5（火）9：00 ～ 17：00　年始初開館日
　※1/7（木）～通常開館（9：00 ～ 21：00）です。

なからぎ 京都府立大学図書館報　211 号 2015（平成 27）年 10 月発行　編集発行人：浅井　学
発行所：京都府立大学附属図書館　〒 606－8522 京都市左京区下鴨半木町　TEL 075（703）5128
FAX 075（703）5192　ホームページ http://www2.kpu.ac.jp/toshokan/toshokan.html